

2021年6月20日 礼拝説教要旨

詩編講解説教65「恵みの豊かさ」

詩編65：10～14、Ⅱコリント8：9

第65編は詩編の分類としては神さまの恵みを感謝し讃える「賛歌」になります。「あなたは地に臨んで水を与え、豊かさを加えられます。神の水路は水をたたえ、地は穀物を備えます。あなたがそのように地を備え、畝を潤し、土をならし、豊かな雨を注いで柔らかにし、芽生えたものを祝福してくださるからです」（10、11節）ちょうど今は梅雨の時期にあります。梅雨は農作物にとっては貴重です。この時期に雨が降らないと作物は育ちません。これは聖書の世界、中東の地域も同じでして、中東、西アジアでは雨季は秋から冬にかけて訪れます。14節に「谷は麦に覆われています」とありますが、雨季に降った雨が麦を成長させ、やがて収穫の季節である春を迎えます。ここで重要なことは、作物を作る人間の働きよりも、その雨を降らせ、地を潤してくださる神さまに目を向けていることです。神さまに一切の源があります。どんなに広大な土地があっても、たくさんの働き手があっても、神さまが雨を降らせてくださらなかったら作物は育たないのです。

しかし人間はそのことを忘れております。天気など影響はない。大事なのは人類の叡智だ。最新の技術であり、経済だ。それを追い求めてきた結果、今、この世界はどうなっているでしょうか。例えば温暖化などの気候変動の問題があります。気候のバランスが明らかに崩れています。毎年、この時期になると昔はほとんど聞かなかった「熱中症」で多くの人々が倒れます。また雨の降り方が尋常ではありません。毎年のように災害が起こり、そしてそれが人間のあらゆる営みを停止させ、健康被害を起し、経済活動に影響を及ぼしています。すでに何十年も前から科学者たちはこのことに警鐘を鳴らしてきました。2015年によりやく温室効果ガスの削減を盛り込んだ「パリ協定」が作られました。しかしそれでも主に先進国と呼ばれる国々は経済を優先させ、なかなか積極的に温室効果ガスの削減に協力しません。その結果、近年の異常気象に明らかなように様々な環境への影響が現実問題となっています。全ては繋がっています。そしてこの悪循環はすべての根源である神さまを見失い、人間が作り出す豊かさしか見ていないことに原因があります。それが人間の罪なのです。

けれどもそのようなわたしたちを神さまは憐れみ、恵みによって神さまの方からわたしたちに手を差し伸べてくださいました。それが現実となって現れたのがイエス・キリストの救いです。今日の詩編にもそのキリストの御業が表されています。10節に「あなたは地に臨んで」とあります。「臨む」と訳された言葉は具体的に「訪れる」ということです。ある翻訳では「顧みる」と訳されています。このような罪の悲惨を神さまは顧みてくださって、そして自ら訪れてくださった。それがイエス・キリストの出来事に他なりません。そして自らの命を献げてこの罪ゆえに貧しくなった世界を、人類を潤してくださったのです。

今日あわせて読みました新約聖書に「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」（Ⅱコリント8：9）とあります。「主の貧しさ」それはキリストの受肉と十字架を示しています。水が上から下へ流れるように、神さまは天からキリストという溢れるばかりの恵みを注いでくださった。今日のところには恵みの雨、水の豊かさが示されますが、例えばヨハネ福音書に「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至

る水がわき出る」(4:14)とあります。キリストご自身が生ける水となってわたしたちに注がれた。ご自身の命を注ぎ尽くしてくださった。そしてよみがえりの命をもってわたしたちを御前に近づけてくださる。立ち返らせてくださる。これほど豊かな恵みがあるのでしょうか。人類が御前に立ち返り、世界が回復される道もまたキリストによって示された神さまの豊かな恵みによるのです。そしてこの恵みの豊かさを知る時に、わたしたちの生き方もまた大きく変わるでしょう。

ギリシア語で書かれた旧約聖書「七十人訳聖書(セプチュアギンタ)」があります。この第65編の見出しは新共同訳聖書とは違っておりました、「捕囚から帰還しようとした時のエレミヤとエゼキエルの歌」という見出しになっています。この詩編の背後にも捕囚の出来事があると理解してよいでしょう。帰還民の歌ということなら、捕囚から帰ってきた人々が見た景色はどんな景色だったろうということを想像します。それは今日の詩編にあるような美しい景色ではなかったはずで、奪い尽くされ、荒れ果てた廃墟のような町、荒涼とした風景だったのではないのでしょうか。でもこの詩人の目には、その大地を憐れみ、恵みを注がれる神さまの恵みが見えているのです。

以前、説教でジャズの名曲「Body and soul」を取り上げてからよく昔のジャズを聴くのですが、ルイ・アームストロングの「What a wonderful world」(邦題「この素晴らしき世界」)を思い出します。「わたしには緑の木々が見える。赤いバラの花々も、わたしと君のために咲いているんだ。そして一人思う、なんて素晴らしい世界だと。わたしには青い空が見える。白い雲も、輝き祝福された日、神聖な夜、そして一人思う、なんて素晴らしい世界だと」この歌は1968年に作られました。これは当時泥沼化していたベトナム戦争への嘆きから生まれたと言われます。そうであれば、彼らが見ていた景色は、緑の木々や赤いバラ、青い空、白い雲というよりも多くの人々の血が流され、枯葉剤がまかれた荒涼とした大地ではないのでしょうか。でもそこに緑の木々、輝き祝福された青い空を見る。それはこの荒涼とした大地を神さまが憐れまれ、キリストを通して溢れるばかりの恵みを注がれることを知っているからです。どんなに荒涼とした時代を生きていても、この神さまの豊かな恵みを知る時に、わたしたちの目に映る景色も美しい緑の牧場、神の国の到来、世界の完成が見えるのではないのでしょうか。